五省

一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥ずるなかりしか
一、気力に缺くるなかりしか
一、努力に懾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人 西能 正一郎

公私病院、話し合おう

この危機をはね返すために

西能院長 本多県医師会長に陳情

西能病院長、西能正一郎氏は、このほど富山県医師会に本多幸男会長を訪れ、「現下の病院の危機に際し、富山県下公私病院の合同会議を早期に開催してほしい」との陳情書を提出した。これに対し、本多会長は「さっそく理事会に審る」と答えた。西能院長は「医療法改正案は単なる医療費の圧縮に止まらず、病院、診療所の機能分化、病床規制など現存する病院の圧迫強化の施策が盛り込まれ、現下すでに医療費の据置きと、人件費の高騰にはさまれた採算割れ、事業継承税制の不合理などにより危機に瀕している私的病院は、その存立を脅かされている」と訴えた。陳情書の概要は、つぎのとおり。

—病院は、規制する法律、内部管理の質、経済的基盤など、その運営にあたっては、診療所とは本質的に異なった環境におかれております。かねてから、これらの問題を合理的に処理して、より一層地域医療の向上に力を発揮できるように病院には病院の圧迫が最短距離と考えている現在、わずか百四十病院ではありますが、県下の各病院長が、この対策はおろか、事実さえも知らないで塗炭の苦しみをなめることは非道とさえ思われます。事態は刻々と進んでおりますので、一刻を争う状態に追い込まれてまいりました。一刻も早く、富山県下百四十余の病院の意志統一を図るための公私病院合同会議の召集をお願い申し上げます—

これに対して県医師会は理事会で検討し、いまある組織体が中核となって、西能院長の趣旨を徹底するよう全面的にバックアップすることになった。

長独自の会合が必要であると考えておりました。

このことに関しては、前会長時代から折にふれ進言申し上げてきたことはご高承の通りであります。日本医師会には病院部会もあり、これを受けて県医師会にも同様組織があるやに承っておりますが、今まで私共末端会員には何の呼び掛けもなく、残念ながら病院を対象とした施策も目にとまりません。私の記録では、五十四年十一月十三日、県医師会主催による県内病院長懇話会が開催され、富山県における病院の組織づくりが協議事項とされましたが、これが最初の最後であります。

他の都道府県では、すでに病院だけの会合が頻々と持たれ、県単位の病院連盟が結成されて活発な運動を行なっており、この点では、富山県は最後進県に数えられます。

厚生省が医療費の圧縮

健康の意味

西能 正一郎

日曜の朝の時事放談は私の好きな番組の一つである。細川隆元一流の手法で現在の新聞種をクリアカットに論破してゆくのは小気味の良いものである。五十八年九月十八日も隆元先生は元気であった。大韓航空機の撃墜事件に始まり、一転して藤沢薬品の産業スパイ事件に至り、やがて薬品会社の儲けすぎに発展し、次いで医者の薬漬け、検査漬けを叩いて時間切れとなった。

現在、国民医療の問題で、われわれ医療人が厚生省を相手取って必死に抵抗し、ジャーナリズムも今度は少しは理解を示し始めたと思っていた矢先、この論客にして、この程度の理解しかないという現実を知った事は淋しいことである。

たしかに医療は高度の科学の粋を集めて生命の不思議と、かかわりあいを持とうとする、独特の専門分野であり、素人の安易な理解はかえって危険ではある。が、いかに健康で生きるか、病気になったら早くよく元の健康にもどろうとする願いは、一人一人のものであって専門的な聖域でもなんでもない。

国民の総医療費が十三兆円近くなって、このままでは毎年一兆円ずつ自然に膨張する。それに対する費用をどこから捻出するか、あるいは膨張を抑え込もうとするかという選択は、医療の尊厳とは関係なく、国民の総意によって決めらるべき単純な問題である。

聴診器やヨードチンキで代表される過去の医療もならない。八十才であれ、九十才であれ、生きている人が死ぬということは大変なことである。そしてどんな手段を講じても苦痛少なく健康人の仲間入りをして生きてゆきたいというのが生きている人のほんねである。この願望を満たす手段を何人といえども阻止する権利はない筈である。

現在の医療費圧縮の問題は、第二臨調にからむ国庫支出の抑制を出発点として、厚生省は単なるお金の面からのつじつま合せのための苦しまぎれの案にすぎず、国民の健康を守ることは消費なのか投資なのかという原点の検討がなされていない。若し今まで行われてきた医療が、消費あるいは浪費であったとしたら、これほど短時間に世界のどの国も果せなかった平均寿命の延長が起ったであろうか。そして寿命の延びた健康な国民が協力して、日本を経済大国に押しあげたのではないか。

私は医療費は非常に有効な不可欠の投資であると主張したい。勿論、投下された資本を無駄のないよう運用することは必要であるが、このことは次の次元の問題であって、目標をあやまり国民の幸福をもぎとるようなことがあってはならない。

生きるものは生きる権利がある

つじつま合せで幸福をもぎとるな

医療ではあった。昨今では、エレクトロニクスを始め最先端の科学技術が参画して、身体の中のあらゆる情報が捉えられようとし、遺伝子工学で代表される治療のめざましい進歩が患者さんに取り入れられようとしている。

これらの科学の発展の成果を病める人に利用しようとするなら、その費用が高騰するのは当然の事であって、医療費の圧縮を理由に新しい医学を国民に提供することをさまたげるようなことがあってはな

あすなろ

水上勉の小説に「桑の子」という作品がある。明治の中ごろまで貧村では生まれた子を間引きする風習が黙認されていた。若狭地方ではヘソの緒をつけた赤ん坊を桑畑に〝とちなんぴん〟と呼ぶ深い穴を掘って捨てた。生きてそこから這い上がってきた子は〝桑の子〟と呼び、世にも珍しい運の強い子として育てた。ところが吹雪の中で生き残り村人に畏敬されて育った〝桑の子〟が十三歳でコレラで死んでしまうという話だ▼人は「ついている」とか「持って生まれた強運の星」とかいう。しかし、そんなものは一生続くものではないし、好運は一瞬に悪運に暗転することもある。一生の終着点に立ってみると、好運と思ったのが実は悪運だったりもするものだ。好運とか強運とかは、ひたすら誠実に努力精進し自分の力で呼び込むものではないだろうか▼帯広に住む菓子作りの名人・小田豊四郎さん働いても働いても食えず菓子屋の看板を下ろそうと決心した昭和十四年のこと、その日に訪れた一人のなじみ客が話をきいて五百円の大金を貸してくれた▼その金全部で砂糖を買ったら、直後に砂糖は配給制になり店は一気に盛り返したという▼小田さんはこういう。「運ではない。人生は最後で全力を尽くせということだ。百里の道は九十九里をもって半ば、最後一里が勝負だ。この一里が強い強運を呼びこむ」

医療法人 西能病院の診療体制

●年中無休・24時間受付の診療体制を敷いております。●救急車（2台）は、要請により出動致します。

一般受付時間（日曜・祭日は休診）

診療科目	午前	午後
整形外科	月〜土 8：30〜12：00	月〜土 16：00〜19：00
リハビリテーション科	月〜土 8：30〜12：00	月〜土 13：30〜19：00

診療科目	午前	午後
内科	月〜土 8：30〜12：00	月〜土 病棟回診
形成外科	毎月1回 8：30〜12：00	（診察日は受付でおたずねください。）

健康法の問題 (17)

矢野三郎

ふえる高年者の有病率
運動と食事のバランスを

最近発表された昭和五十七年の簡易生命表によると、平均寿命は男が七十四歳、女は八十歳である。十年前に比べると、男女とも、約四歳も延びている。現在の健康法ブームがどの程度、これに影響を与えているか簡単に結論はだせないが、わが国もいよいよ世界一の長寿国になったわけで、その結果として、健康法の問題が今後ますます重要になってくることはまちがいないであろう。

その理由として、寿命が延びているにもかかわらず、高年者の有病率が増加しているという事実「二十四・二%となっている。このうち、「食生活に気をつける」と答えた人でも、その内容について問い合せると、おそらく答えは千差万別であろう。

ここに慢性病時代における健康法の問題がある。

健康法を選択するにあたって、実際、一般の人々はどのような方法で、知識を得ているのか、どのような方法がもっとも強い影響力を持っているのか興味のある問題である。近頃、豆乳が健康食品として注目されているが、この話を聞いて、牛乳をやめて豆乳ばかり飲んでいる人があるという。豆乳が牛乳であることはいうまでもないが、病気になってからでも、薬より、食事療法や運動療法が重要で、やはり日常の健康管理が第一ということになる。

近年、成人病に関する知識もかなり普及してきたので、厚生省の調査をみても、「成人病を予防する方法があると思うか」という問いに対して九十二・四%の人が「ある」と答えている。ところが、具体的にどうしたらよいのかという点になると、答えは各人さまざまで、もっとも多いのが「食生活に気をつける」の三十二%、ついで「心身の過労を避ける」の三十一%、ついで「適度な運動をする」の二十一・六%となっている。

食品のバランスをとるということも必要であるが、ことに食事のバランスをとることが、栄養のことを知らないし、栄養士に運動の効果をきちんとされるのは感心できないし、一つの食品に頼り過ぎるのは栄養のバランスを乱す原因にもなる。

食事のバランスをとるというだけでなく、運動に関しても間違った知識をもっている人が多いという。

最近、福岡県の博多保健所では、運動と栄養のバランスを考えた健康増進教室を開いて、この困難な課題に積極的に取組んでいるが、成果が楽しみである。

（富山医科薬科大学・教授）

お話が聞こえる

川口さん（ハリ治療室）にお礼の手紙

私は、このたび五十肩変形性関節症のため、西能病院で入院治療させていただき、大変お世話になりました。

そして、入院中に、ハリ治療室で耳のハリをお願いしましたが、おかげさまで、耳が聞えるようになりました。いつも住んでいる家の中で試してみましたら、良くなっていることが、はっきりと、わかりました。近所の人たちが退院のよろこびにきてくれましても、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございましたが、なにか遠慮がたちまして失礼して帰りました。川口先生からくれぐれも、よろしく新潟の老婆がよろこんで帰っていきましたと、申し上げてください。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございましたが、なにか遠慮がたちまして失礼して帰りました。川口先生からくれぐれも、よろしく新潟の老婆がよろこんで帰っていきましたと、申し上げてください。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっております。

退院するとき、院長先生にご挨拶申し上げとうございました。

川口先生も、また一そう知恵がつきまして、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっ

「五省会ニュース」は地域社会の皆さまの医療福祉向上に役立つよう務めております。医療、健康に関する要望や、身近な問題などについて投稿（有見さむ）をお待ちしています。

〝おばあちゃん、留守番もできるね〟
家族や近所が大よろこび

（ハリ治療室）

（二）

ハリ治療（上）

西能病院では、ハリ治療をはじめてから三年になります。その間、五十肩、腰痛、肩こり、むちうち、難聴、便秘などの患者さんを数多く治療してきました。しかし、ハリ治療を迷信的に思ったり、理解しておられない方の多いこともわかりました。中国から日本に伝わって千五百年のハリ治療を知ってもらうため、同病院ハリ治療室担当の川口知明さんに聞いてみました。

――ハリの生体に及ぼす作用は、科学的に証明されつつあります。この作用は、すべての人類に共通の現われです。

当院でハリ治療を受けた95%は、生まれてはじめてという人たちで、ハリ治療経験者は、ほとんどいません。最初、ハリ治療室へ入ってきての第一声は、みんな異口同音に、「ハリは痛くないですか」とか、「ハリはこわくないです」かで、不安気に私の顔を覗きこみます。だれ一人として、治療を信じて受けにきた人はいないのです。

むしろ、不信感の塊りです。その意味で、みなさんも、まったく同じだと思います。生まれてはじめての経験ですから、当然のことでしょう。

「ハリを身体に刺すのですから、多少は痛むと思いますが、心配いりません」

と、話しますと、「痛いんですか」と、今入ってきたドアと、私の顔を見くらべます。

やがて決心…。それでも、ベッドの上でもじもじ……。

治療後、さっそく、今までより悪くなっていないかと、心配のあまり、こっちが勝手に推測してその病気の患者を番号で呼んだとする。かえって周囲の目をひくんじゃないかなあ。ナンセンスな話です」

〝アレアレ、いたくない〟
95%は未経験者

「アレ、アレ、痛くない、アレ、ホント、不思議だあ―」

目が笑っています。

「ハリって痛くないですね」「ハリって効きますね」と喜んで、二度、三度と治療にこられるようになります。

この変ぼう振りを見るにつけ、ただの金属のハリが、使い方一つで、思いがけない働きをします。ハリって不思議であり、人体の神秘性を感じるのであります。

このように、みなさん自身が、「信じる」「信じない」と頭のなかで考えていることは大した問題ではないのです――

みとおし暗い　信頼関係

――心あたたかな病院と関係があると思いますが、医療の原点は医師と患者の信頼関係にあるとされていますね。その関係が今後育っていくのかいなかは、それともひずみがますます大きくなっていくのか、先生のみとおしはいかがですか。

「うまくいくとは思えません。極端なことをいうようですし、対談内容はおもしろかったですよ。

「それがね、週刊誌のほうでは対談内容を変えてくれましても、お話が聞えて、とても嬉しうございます。

若いころからの難聴が年と共にひどくなり、三年前に病気をしましてから、また一そう重症となり、苦労しております。

あちこちと診察を受けまして最後に医大の専門医へ参りましたら、「これは、もう神経が枯死しているからあきらめるしかしようがない」と申されました。

それが、このたび川口知明先生のすぐれた技術と、御熱意とにより、良くしていただいたのでございます。本当に有難く、嬉しく、お礼の申し上げようもございません。家のものも大変よろこんで、「おばあちゃん、これから家の留守番もできるね」と、いっ

ねんりん　⑱

西能病院のあゆみ

思い出を語る〈10〉

中島　それで、出勤簿のハンコの後始末はどうなりましたか。

鐘　一週間ばかりすぎて同僚が教えてくれました。お叱りもなく、ハンコを押さなかったやく一週間分の給料は無事もらえたので、ほっとしました。それから、もう一つ、時間外勤務に手当てがつくのを知らず、提出しなかった何日分かはもらえませんでした。別においしいとは思いませんでしたが、現在では考えられないことです。

中島　レントゲン室はひどかったようですね。

鐘　そりゃ、もうお話になりませんでした。とくに、暗室が階段の下にあって、しゃがんで入るような狭い場所でした。

出席者（敬称略）

△元勤務者＝久米信子、高木信正、丸岡ミサヲ、盛田美奈子、開発正子、岡本春子、米田絹代

△現勤務者＝堀井富美子、石倉喜一、水島敏子、津田勝美、川西信子、広長百合子、鐘貫、伏木峯子

△西能正一郎（院長）

西能　斌（副院長）

△司会、中島総務部長

上はいつもバタバタの大通り、頭がガンガン割れそうになったものです。それで、なんど、やめようかと思ったかわかりません。それを、（五福に）診療部門ができるまでがんばろう」と、希望をつないでいたのです。それにつけても、現在の完備したレントゲン設備は恵まれています。

中島　いろいろと、ご苦労さんでした。ところで、西能病院の職員で自家用車を購入されたのは鐘さんが第一号だそうですね。

鐘　三十九年四月にパブリカを買い求めました。そのわけは、帰りが遅くなるからでした。なにしろ、忙しくて、忙しくて、その上、何でもやりましたから仕事が終わるのが大低七時ごろでした。私は高岡からバスで通勤しています。

石倉　鐘さんが入られたとき、院長が「鐘さんです。ただし、奥さんと子供さんがおられます」と紹介されたことを今でも忘れずに覚えております。「いい男に車」が、当時、どんなにモテたかまより悪くなっていないかと、心配のあまり、こっちが勝手に推測してその病気の患者を番号で呼んだとする。かえって周囲の目をひくんじゃないかなあ。ナンセンスな話です」

暗室の上で〝バタ、バタ〟
今は恵まれたレントゲン設備

に乗っとられん時代だったもんですからモテたことは確かです。

石倉　鐘さんが入られたとき、院長が「鐘さんです。ただし、奥さんと子供さんがおられます」と紹介されたことを今でも忘れずに覚えております。「いい男に車」が、当時、どんなにモテたかを想像して下さい。（笑い）

中島　米田さんは昭和三十九年九月からでしたね。

米田　私の場合は、看護婦を募集していることを聞いて面接に行き、院長にあって、勤めることになりました。入った当時、五福の車庫の上に八畳と六畳の寮があり、八人ぐらい住んでおりました。石倉さんが五福でつくった朝の給食を車で星井町へ持っていかれました。これに遅れないようにでかける毎日でした。星井町では、手術日に、いつもガーゼ洗いをやっていたことを覚えております。

石倉　あの当時は、星井町にも、五福にも入院患者さんがおられ、五福で作った給食を星井町へ運んだものです。

中島　米田さんも、院長におこられた思い出が……。

米田　ハイ、やはり、おこられました。前の勤めは内科見習いだったので、何もわかりませんでしたから。手術のさい、一生懸命に患者さんの足なんか持っていたことを覚えております。

わたしはこう思う

強まる医療費抑制
経済的弱者にしわ寄せ

患者負担増は手遅れ患者をつくる

――話は変わりますが、国の医療費抑制策は厳しいですね。たとえば、健康保険本人の給付を十割から八割に引き下げる案なんか。国民にとっては大変な負担になるようですが……。

――確かに患者負担は大きくなるね。私見ですが、給付率九割が妥当なんじゃないかなあ。八割だと、ちょっとした病気はがまんし、結果的に手遅れになるケースがふえるでしょう。

さらに問題なのは、そうしたことが経済的な弱者に真っ先に及ぶという点です。これは国民皆保険の趣旨からも十分に配慮すべきだと思いますね。

もっともこの制度改正案は国会で成立するかどうか、いまのところ流動的ですね。衆議院の解散、選挙もさっぱかれている現状では、恐らく廃案にならなくても継続審議というところに落ち着くんじゃないかなあ」

手術回数日本で三本の指に

――ところで先生は近く退官されると伺っていますが、県立中央病院には何十年ぐらいお勤めですか。

「随分永くいました。三十年です。院長職は六年間になります」

――いろんな思い出も多いことでしょう。

「うーん、やはり印象深いのはイタイイタイ病論争だね。あとは外科医として無我夢中で診療に取り組んできたことかな。お陰で、手術回数では日本で三本の指にはいっているんだそうです」

――大変なキャリアですね。いまもメスをもって……。

「いやいや、院長になってからはそれほど多くはありません。体験なんですが、大体五十歳を過ぎると手術回数も下降線をたどります。第一、目が弱る。外科医がメスをもち、意欲十分なのは五十歳までと思うんですよ」

多彩な能力を求められる病院長

――でも、きょうまで日本有数の大規模病院のトップとして十分な活躍をしてこられた。そんな経験から、今後の院長像についてどうあるべきかお聞きかせください。

「そうですね。だれもがわかるとおり、一般の会社社長とは明らかにちがった能力が求められますね。

定年退官した大学医学部の教授なんかで、病院長に天下る人もあるが、一般的にいって不適当だと思うな。学術的にはとても有能だろうし、そうしたことが院長資格の一つだとは思うが、病院の運営管理能力に欠ける場合が多い。そうかといって、運営管理能力がずば抜けていても医療畑でない人は、これもダメ。なぜなら、医師をはじめ医療職員はついてきません。つまり、院長像として求められることは、医師として業人の考えなんでね。泌尿器科、或いは産婦人科だって実に多様な病気がある。どの病気が恥ずかしいのかよくわからんが、こっちが勝手に推測してその病気の患者を番号で呼んだとする。かえって周囲の目をひくんじゃないかなあ。ナンセンスな話です」

日本一の病院づくりを

――最後に、これからの県立中央病院に望まれることは……。

「日本一の病院に育ってくれること。医療技術面で、さらに患者と病院の信頼関係や地域医療の中心的な基幹病院として、どこにも負けないという意味です。自治体病院は、一般の私的病院に比べると、経営感覚や職員の患者対応で劣る面もあるようだね。ちょっと言葉に熟慮していることではないかなあ」

筆者偶感

医療あれこれ

対談裏話

――週刊誌上で、作家の遠藤周作さんと対談なさいましたね。テーマは〝心あたたかな病院〟それ読みましたが、相当にやり合う場面があったようですね。

「そうなんですよ。対談が終わったあと、週刊誌の記者が私にこういうんです。〝遠藤先生はいつもついているけど、先生にこんなはっきりものをいったのはあなただけです。非常にすっきりしました〟って」

――遠藤さんは対外的にそんなこわい存在なんですか。

「そう。記者が遠藤さんを迎えにいくとき、一分でも遅れると小言をいわれる。まあ、例の記者にとっては天皇みたいな存在のようですね」

――なるほど、失礼ですが村田先生もものごとをはっきりおっしゃるほうですし、対談内容はおもしろかったですよ。

「それがね、週刊誌のほうでは対談内容を変えませんということで、私にゲラ刷りを送ってきたわけ。私がしゃべったことがちゃんと書いてあるので、そのままゲラ刷りを返した。ところが、発行されたものをみたら、随所がぶっつんと削除されて、ぼくに、電話で記者に抗議しました。説明では、ぼくがゲラを見たあと、遠藤さんが見て私のところを削ったというんです。結局、その記者は謝罪してきました」

人情論では医療を律しきれぬ

――対談で意見が衝突したのは、どんな点ですか。

「結局、あの人のいうことはわかるんです。患者にやさしくしろということは……。しかし、〝ニッパチ〟（二・八体制、看護婦の勤務体制）をご存知ない。それでその説明をしなければならない。それにしても、ニッパチを知らず、ただ人情論なんですね」

「だからぼくは、あんたのいうことはわかるけれども、現実問題としてあんたのおっしゃるようにウサギ小屋かカイコ棚のような施設に付き添い家族を泊めれるか。そんなことをして病気になられたら大変だ、といったんです。

家族の面会の問題にしても、君は面会をさせないといいながら、させているじゃないか、建前とちがうとおっしゃるが、人間というものはね、そんな判で押したようなことはできんですよ。

家族の付き添いについても、あのときいったんだ。付き添いできる人はいいが、それをできない人がいっぱいいる。そのために家庭破壊につながることだってある。だから、病院では家族の付き添いを認めず、基準看護をするということになっているんだって」

――外来患者が病院で名前を呼ばれ、たとえば小水をもっていくのは恥ずかしい、番号で呼ぶような配慮があってしかるべきだとの意見もありましたね。

「それなどは全くもって業人の考えなんでね。泌尿器科、或いは産婦人科だって実に多様な病気がある。どの病気が恥ず

富山県立中央病院院長　村田　勇先生

わたしはこう思う

「やあやあ、お待たせしました。どうぞどうぞ」土曜日の昼下がり、富山県立中央病院三階の院長室。村田院長は実にきさくだ。こっちがお尋ねするとやっぱり返ってくる。それもズバリズバリといった感じ。県中在職三十年、院長職六年、文字どおり県中に生き、県中を支え、県民の健康を守ってきた。メスを振った回数は、日本の外科医のなかで三本の指にはいる。〝医の良心〟村田院長に「医療あれこれ」を聞いた。

〈18〉

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

美しいものが見えてきた

〈第十六信〉

松下英勝

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

幸福を摑まえてください

自分は今、心身ともに充実した毎日をすごしております。

このほど、郡馬の元体育教師、星野富雄さん（身体障害者）の詩画展を、姫路市のデパートでみてきました。そして、幸福そうな結婚生活をビデオでみて、本当に素直な気持ちで祝福することができました。

自分は、よくいわれました。

「マツ、お前は、そんな体になって不びんに思うが、元気な時に人のできないことまでして満足であろう。世の中には、何も知らずに、無垢のままで障害を背負って生まれてくる人、途中で障害に遇う人もある。その人たちのことを考えるならば、お前も、諦めがつくのでは……」

これに、自分は、いつも、こう答えています。

「一層、何も知らない人の方が苦しみが少ないのでは…。自分のように知りすぎていれば、それを、その思いを、摘みとるのは、そして抑えるのは辛いかも知れない」と。

しかし、自分は幸福の絶頂にいた時を経験しています。そして今は、星野さんの幸福を素直に一緒に喜ぶことができるようになりました。

自分の今の気持ちは、結婚を夢見るほど、思いあがってもおりません。

「自分は、いろいろなことを経験しました。だからがまんもできます。何も知らない人たちは、色々な経験を、幸福を摑まえて下さい。幸福を摑んで下さい」と、いいきれます。

星野さんの障害歴には、華れいとさえ感じ、それが決して不自然でない美しさを受けました。母の、友の、そして神の大きな愛を一身に浴びて生きてこられた、その崇高さには頭が下がります。

自分の障害歴は、クチャ、クチャに泥々に汚れ、所詮、比較にはなりませんが、不思議と、星野さんの生き方と違っているように思えません。それが、お互い、分相応の生活と、納得がいくのです。

なんだ、かんだと、訳けの判らぬことばかり書き綴りましたが、書き直しも、清書もしません。よろしくご判読ください。ごめんなさい。

さきに、病院を訪れたさい、古沢総婦長さん、山本看護部長さんと、束の間の話をして、コーヒーを頂いたのが、何故か、印象深いのです。星野さんの詩画展で外出のさい、姫路城のペナント状差しを買ってきました。部屋にでも飾ってください。

とにかく、みなさんにまたお会いできることを夢見ながら頑張ります。

（姫路市打越一一〇〇、重度身体障害者授産施設、愛光園）

◇　◇　◇　◇　◇

大地を踏む ⑮

富山市蛯町　村山二郎さん（五五）

富山大橋上から川原をながめる村山さん

励ましの声がうれしい

杖を頼りに歩行訓練の毎日

左手に握りしめた一本杖を頼りに、村山さんは、一歩一歩しっかりと前へ進む。

富山大橋のうえー。視線を上流の川原へ。（草もの びた、澄んだ水の流れも秋の気配だ）季節の移り変りを感じとる。

右足、右手が動かなくなり、救急車で県立中央病院へ運ばれたのは昨年十二月三日。脳出血と診断された。入院して、リハビリ訓練、一本杖でどうにか歩けるようになったので、三月に退院した。引き続きリハビリ訓練（右片麻痺、右肩関節拘縮）のため、毎日かかさず西能病院に通院している。

午前十一時すぎに自宅（富山市荒町交差点近く）を出て病院のバスに乗る。一時半かけて、みっちり訓練。帰りは一本杖で歩く。これも訓練の延長だ。二・二キロの道のりを、最初は一時間半もかかった。不自由な右足が、まかれて前に進まず苦労した。途中で三回も四回も休んだ。それが、今では、休まずに一時間で帰れるようになった。「これも訓練のおかげです」

「歩いて帰る途中、車の窓から手を振ったり、わざわざ車を停めて激ましの言葉をかけてくだされる方たちがあるので、有難いことだと思っております。神通川原の風景も楽しみの一つです。キジがおりますよ。水の量や色の変り具合にも面白味がでてきました」

右手足が不自由になったので、商売の自動車ガラス店は、この四月、東京で同じ商売の店に勤めていた長男（二五）を呼びよせてつがせた。

村山さんは、きっぱりいいきる。

「私はまだまだ若いですちゃ。右足をきたえて、一日も早く仕事に打ち込めるようになることが夢なんです。右手の方は、よくなりませんが、左手で克服しております。私は器用な方ですから…」

〝ダットさんの村山〟といえば、テレビや新聞にも登場して有名だ。父が、終戦直後に手に入れた昭和十年製にみがきをかけて大切に受け継いでいる。これといった楽しみや趣味のない村山さんは、機械いじりが大好き。研究したものを発表し合ったりする日曜発明学校の理事でもある。

「頭のいい運動になりますよ」と、目を細める村山さん。

激動する病院の光と影

～浜松で第33回日本病院学会～

「激動する病院の光と影」をテーマにした第三十三回日本病院学会（学会長・中山耕作聖隷浜松病院長）は、九月八日から十日までの三日間、浜松市の浜松市民会館を会場として開かれた。一般演題百八十九題、特別講演、パネル、シンポなど、これからの医療の方向を示す意欲的な内容のものだった。西能病院からは、西能院長ら十三人が参加、五演題を発表、学会評議員の西能院長は、一般演題の医事管理・診療管理（四演題）の座長をつとめた。

意識改革が不可欠

西能病院から五演題、十三人参加

学会長講演

会場前で記念撮影の参加者

中山学会長は、八日の「激動する病院の光と影」と題する講演で、現在病院を取り巻く厳しい環境や諸問題に対して、起死回生の妙薬はないけれども、光と言い、影と言い、一つの現象の裏腹の関係である。視点を変えることによって、われわれ病院人は、何んとか影を一つひとつ消していく努力をしていくしかないであろうし、またそれには医師を始めとする病院職員の意識改革が不可欠であることを強調した。

西能病院が発表した五演題はつぎのとおり。

△〔薬剤〕外来患者の投薬に関する実態調査＝杉村洋。

△〔看護の諸問題〕慢性関節リウマチ患者の情報収集についてのこころみ＝金谷智恵子

△〔同〕頚部安静を要する患者の頭髪保清の工夫＝岩城真由美。

△〔リハビリテーション〕当院における脳卒中片麻痺患者の滞在期間＝飛田勉。

△〔栄養・給食〕検食に関するアンケート＝井上千恵子。

薬を一応服用が95％

〔外来患者の投薬に関する実態調査〕（要旨）これからの患者指導の一助にするため、外来患者を対象に「薬についてのアンケート」用紙一千枚を配布し、八百二十枚を回収した。

調査内容は、①薬を指示どおりきちんと飲んでいるかどうか②薬の保管場所はどこか③薬が残った時はどうしたか④その理由など九項目である。

その結果、薬袋に記入された指示にしたがって、一応服用するとの回答は95％であった。

薬が残った理由では、一番多いのが飲み忘れの40％である。

飲み忘れで、十代、二十代が50％を占めている。

患者の90％以上は薬物治療の重要性を認識しているものの、40％は何らかの理由で、理想的な服用をしていないことがわかった。

このため、患者の判断で調節せず、指示どおり服用させる、薬を捨てる時、他人の手に渡らないようにする、服用中の薬剤以外の薬を服用する場合、残した薬を服用する場合には医師又は薬剤師に相談する、薬の保管を指導する、外来投薬の場合、一回一包を採用する、投薬された薬に疑問がある場合、直ちに電話で問い合わせるよう指導するなどに留意することにした。

（杉村　洋）

配膳前の検食は一施設だけ

〔検食に関するアンケート〕（要旨）昭和二十五年からの検食制度は、満足に運営されていない、いくつかの問題点がある。県内基準給食認可病院五十施設の栄養士を対象に、検食担当者、検食時間、検食場所など六項目についてアンケートを取った。

検食担当者は、医師が33、医師以外が10、検食していないのが6施設もあった。

検食時間は、配膳前が理想である。ところが、配膳前に検食しているのは1施設だけであった。

これは、検食者の作業時間帯と、調理のできあがる時間帯の食い違いが配膳前の検食を不可能にしているためである。

検食者の資格として①専門的立場②管理的立場③客観的立場から適格者を選び、三者交代で検食を行うのが最善である。

専門的からは、医療業務の責任者として、献立の趣旨に沿った調理がなされたか、どうかをみる。

管理的からは、材料購入の検討など経済面のチエックを行なう。

客観的からは、一般的嗜好、味の問題などの助言を行なう。

これら三者の意見をミックスし、より有利な情報をえて献立、調理に反映させることが好ましいと考える。（井上千恵子）